

## 音楽のイメージを色で表現する保育実践

—幼児の「聴く」活動を考える—

On expressing the image of music by color in nursery school

嶋田 由美

SHIMADA Yumi

(和歌山大学教育学部)

### 抄録：

「幼稚園教育要領」で示された、幼児の「豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ために、また「保育所保育指針」中の「豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培う」ためには、個々の子どもの「自分なり」の感じ方を認め、そこを立脚点とした保育を考えることが重要な課題である。本実践報告は、指導者側からの一方的な表現指導に陥りがちな音楽活動の現状を改善するために、幼児期に深く音楽に接する聴き方を育成し、そこで個々の子どもが「感じたことや考えたこと」を認めながら、個々の創造性を伸ばす保育を考えるための試行的実践の報告である。本実践では、音楽を聴いて感じたことを、子どもは具体的な絵ではなく、色を塗ることによって表現しているが、描かれたものからは、個々の子どもが曲を深く聴きこみ、曲から受けた印象を率直に色で表現していることが窺われた。

キーワード：深く聴く活動 幼児教育 「展覧会の絵」 イメージ 色 パステル

### 1. はじめに

「幼稚園教育要領」の領域「表現」では、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」<sup>1)</sup>と記されている。また、「保育所保育指針」の「保育の目標」の一つに、「様々な体験を通して、豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培うこと。」<sup>2)</sup>が掲げられ、6歳児の保育の「表現」に関する項目の中では、「様々な音、形、色、手ざわり、動きなどに気づき、感動したこと、発見したことなどを創造的に表現する。」<sup>3)</sup>と、その内容が明記されている。このように、幼児期の表現領域の保育指導に関して、幼児の創造性を豊かにすることや、幼児が創造的に表現することへの援助が大きな課題となってきている。

この課題に向けて保育現場では、様々な実践が繰り返されているが、概して、それらの実践は、歌唱や器楽などの集団での表現活動という形で現わされることが多いように見受けられる。その背景には、季節ごとの行事や地区の音楽会などでの発表に向けて、日々の保育の中でその準備を行う必要性が考えられる。しかし、えてしてこれらの活動は保育者の側からの一方的な表現指導になりがちな傾向が見られる。そこでは、個々の子どもが「感じたことや考えたこと」はどのよ

うに表現に活かされているのか、或いは、「自分なり」の表現はどのように保障されているのであろうか。

一方で、昨今の子どもを取り巻く大きな問題として聴く力の低下が取り沙汰されているが、表現することに意識が向きがちな保育の場において、聴くことの指導が看過されがちな傾向にあることも否めない。

今川恭子は1990年代から既に、「『子どもたちに何を、どう教えるのか』に一足飛びに向かって」<sup>4)</sup>いきがちな保育の現状を危惧しながら、子どもの経験の中から「音」への気づきを促し、そこからイメージの形成と表現との関係を考えることの必要性を説いていた<sup>5)</sup>。今川のような考えは、「音を介した表現の芽ばえの地図」として具体的に示されているように、豊かな表現を育むための保育環境の在り方を提唱するものである<sup>6)</sup>。また、今川の研究を導いた幼稚園での実践も近年、積極的に学会誌等で紹介されている<sup>7)</sup>。こうした実践や研究では、音楽表現活動の根源となる、「音」そのものへの気づきを大切に、そこから子どもなりのイメージを豊かに育てていくことの必要性が喚起される。

確かにこうした提唱は、保育における音楽表現活動の在り方に一石を投じるものであり、聴く力の低下が大きな社会問題となっている時に、警鐘的な提言である。

しかし、このような、「音」を聴くことの丁寧な指導を評価しつつ、「音」を聴く活動の発展としてこの時期の子どもにも「音楽」を深く聴き込む活動の場が提供されてしかるべきであろうと考える。小学校の音楽科教育が今日抱える課題の一つに、鑑賞教育の在り方が挙げられる。その背景には、教師の側の教材提示や感想文記述などに終始する指導の問題があることは否めないが、一方で、子どもの側の問題として、深く音楽を聴く「聴き方」が子ども自身の内に育まれていないことにも困っていると考えられる。とりわけ、音楽を聴くことによる自分の内面の変化に焦点をあてた指導が、ほとんど為されていないのが現状であろう。しかし、聴くという個人的体験を通して、個々の子どもが何を感じ、何を考えたのか、そして、それを「自分なり」に如何に表現しようとしているのかを保育者や教師がみとり、適切な援助を行うことによってのみ、「豊かな感性を育て、創造性の芽生えを培う」ことが可能であると考えられる。

このような現状を考えると、幼児期からの、「音」そのものを聴くことを基盤としつつ、そこから発展的に、音楽を深く聴くための指導の在り方を考えることは小学校以降の音楽教育とも関連して、大きな課題であると考えられる。本論は、こうした課題意識から、保育園児に対して行った鑑賞指導の試行的実践を振り返り、幼児期の鑑賞指導を考える際に資することを目的とするものである。

## 2. 実施方法

対象：大阪府下H保育園 5歳児22名

実施時期：2007年2月21日 午前11：00～11：45

実施場所：同園内5歳児保育室

準備物：

各園児所有の16色パステル

12.3×12.3cmの四角を二つ印刷した白画用紙

使用曲：

ムソルグスキー作曲（ラヴェル編）『組曲 展覧会の絵』より

①「バーバ・ヤガーの小屋」（3：25）

②「殻をつけたひなの踊り」（1：16）

（いずれも下記のCD所収曲。クリストフ・フォン・ドホナーニ指揮／クリューヴランド管弦楽団

CD番号：WPCS-21031）

選曲の理由：

①曲を聴いた印象を1枚の用紙に色で描くという活動の特性を考え、一曲を通して曲調の変化が少ないもの、形式が余り明確ではないものを選曲した。

②幼児の集中できる時間を考えて選曲を行った。

③この活動の発展として、園児による『展覧会の絵』を聴いて『展覧会』を創る」という活動を構想しており、『組曲 展覧会の絵』から選曲することにした。

④2曲を選曲する際に、曲調の対照的な2曲を選曲するという選択肢も考えられたが、活動の試行的段階ということもあり、動きの多い曲の方が、幼児が活動に入りやすいと考えて選曲した。結果的に極端に対照的な選曲とはならなかった。

実施手順：表1の通り。なお、表1は、当日のビデオ記録をもとに、この活動の概要をまとめたものである。

表1 音楽を聞いて色を塗る活動の流れ

| 時間 | 指導者の発言の概要と指導の流れ  | 園児の発言や様子  |
|----|--|---|
| 0分 | <p>〈導入〉</p> <p>「今日は音楽をよく聴いて感じたことを、パステルを使って色であらわします。」</p> <p>「一つ曲を聴いてみます。その時にみんなはどんな気持ちになるかな、楽しいとか、寂しいとか、恐いとか、悲しいとか・・・あとどんな気持ちがあるかな？」</p> <p>「曲を聴いてそういう感じになったときに、一番合っているなあという色を塗ります。まず、お友達がやったのを見ましょう。」</p> <p>サンプルの曲を流す。（バルトーク作曲「アレグロ・バルバロ」）</p> <p>「どんな感じでしたか？」</p> <p>「今の感じを大学生はこんなふうに描きました。」</p> <p>大学生が描いたものを5枚見せる。</p> <p>「ではみんなもやってみましょう。」</p> | <p>「へえ～」という声もれる。</p> <p>「楽しい」「悲しい」「ふわんふわん」「嫌な感じ」</p> <p>リズムに合わせて身体を揺すりながら聞いている子どももいる。</p> <p>「楽しい」「楽しいけれど恐い」</p> <p>1枚ごとに「うわ～」「すごい」「ああ～（共感）」「楽しい」と反応する。</p> <p>園児の中から「自分でもやってみようかな」という声が出る。</p> |

| 時間  | 指導者の発言の概要と指導の流れ   | 園児の発言や様子   |
|-----|---|--|
| 5分  | <p>〈準備〉<br/>パステルのふたを開ける。</p>  | <p>保育士が援助する。</p>   |
| 6分  | <p>〈音楽を聞いて色を塗る〉<br/>「1番と書いてあるのが見えますか？左側です。これから2曲、聴きませんがまず1番です。2回、音楽をかけますが、1回目はよく聴くだけにしましょう。どんな感じかなあとよく考えながら聴きましょう。2回目に『では描いてください』と言ったら、自分の心に浮かんだ色を塗りましょう。」<br/>「ではかけてみます。まず1回目は聴くだけです。」<br/><br/>「バーバ・ヤガーの小屋」(3:25) をかける。<br/><br/>曲を止めて、「こういう曲です。」<br/>「では2回目をかけますから、音楽が聞こえてきたらすぐ色を塗り始めていいですよ。」<br/>2回目をかける。<br/><br/>「もう1回、聴きたい？」<br/>「ではもう1回かけます。」<br/>3回目をかける。<br/><br/>「先生達が、みんながどんな気持ちを描いてくれたのか聞いていきますから先生にお話をしてください。」<br/><br/>(1番の曲は合計5回かける。)<br/><br/>「では2番目のところをやってもいいですか？」</p> | <p>最初に描く欄を間違えないように、保育士が画用紙の2番の四角の上にパステルの箱を置き、隠していく。</p> <p>リズムに合わせて身体を揺すったり、隣同士、くすくす笑いをしながら聴く子どももいるが、目を閉じて聞いている子どもが多い。私語はない。</p> <p>拍手が起こる。</p> <p>曲がかかる前から既にパステルを取り出している子どもも数人見られる。曲が鳴り出すと同時に、半分以上の子どもが色を塗り始める。男児の方が積極的に塗り始めている。2分が経過した頃に、保育士が全くパステルに手を触れない女児(KA)に、色を塗るように促す。</p> <p>「聴きたい」<br/>保育士が再びKAに色を塗るように促すが、黒いパステルを手にとっただけで全く描こうとする様子は見られない。この間に、保育士は手分けして、色を塗り終えた園児にどのような気持ちかの聞き取りを開始する。</p> <p>友達がどのような気持ちだったかを話すのを興味深そうに聞く様子が見られる。KAはまだ何も色を塗っていない。</p> |
| 24分 | <p>「これから2番を聴きますから、1番の上にパステルをおいてください。」<br/>「さあ今度はどんな曲かな？1回聴いてみましょう。短い曲だからよく聴いていて下さい。」<br/>「殻をつけたひなの踊り」(1:16) をかける。<br/><br/>「ではこの曲の気持ちを塗りましょう。どんな色でもよいですよ。」<br/>2回目をかける。</p>   | <p>手を膝の上におき、聴こうとする姿勢が見られる。</p> <p>目をつぶって聴き入る様子が見られる。私語はない。<br/>終わると同時に、「何か動いている」「恐くない」「緑」という発言が聞かれる。</p> <p>KAはこの時、1番の四角の左側を黒いパステルで塗り始めるが、保育士が気づき、2番目に進めさせる。2番の四角にはすぐ色を塗り始める。</p>  |

| 時間  | 指導者の発言の概要と指導の流れ   | 園児の発言や様子   |
|-----|---|--|
| 38分 | <p>3回目をかける。</p> <p>「かけた人は手をあげて先生にお話をしてください。」</p> <p>まだ塗りきれていないようなので、続けて3回かける。</p> <p>(2番の曲は合計6回かける。)</p> <p>〈まとめ〉<br/>                     「ではまだの人もいるかも知れないけれど、少し聞いてください。今の2つの曲は、ムソルグスキーという人が作った『展覧会の絵』という曲の中にあるものでした。展覧会の絵を見て、『ああ、この絵にはこういう曲を作りたいなあ』と思って、作曲したのが今、聞いた2曲です。」<br/>                     「ではもう一度、最初の曲を聴いてみましょう。」<br/>                     「バーバ・ヤガーの小屋」の冒頭30秒間をもう一度、聴く。<br/>                     「実はこの曲の絵は、魔女の絵でした。きっと、魔女に追いかけているような感じで作曲したかったのじゃないか。」<br/>                     「2曲目は、こういう曲でした。」と音楽をかけようとする。<br/>                     「楽しかったねえ。何か生き物が出てきますよ。」<br/>                     「殻をつけたひなの踊り」をかける。</p> <p>「この人が見た絵は、小さいひなが踊っている絵でした。」<br/>                     「そう、ひよこ。」</p> | <p>この間に保育士は順次、描き終えた子どもの話を聞いて回る。</p> <p>KAは一気に2番を塗り終えて1番の続きを塗っている。</p> <p>再び目をつぶって聴いている。</p> <p>「楽しかった」と園児が発言する。<br/>                     「うさぎ」「リス」「ネズミ」「ネコ」という声があがる。</p> <p>「ひよこ？」</p> |
| 41分 | <p>「終わった人は、お友達がどんな絵を描いたか見せてもらってから手を洗いに行きましょう。」<br/>                     (保育士と片づけを始める。)</p>  | <p>席を立てて友達の絵を見て回る様子が見られる。指導者にも見せに来る。この時点で、KAは2曲とも色を塗り終えており、両曲の印象を保育士に語っている。</p>  |
| 45分 | <p>〈終了〉</p>   |  |

本園は、筆者が7年前から、3歳児以上の音楽表現活動の指導、及び、保育士へのピアノや声による表現の指導を継続的に行っている園である。本活動は、5歳児への指導の一環として行われた。

活動は筆者が主導し、子どもの反応を見ながら鑑賞の回数や間隔を調整した。園児からの聞き取りは、筆者の他に、担任保育士、主任保育士、保育職歴の長いフリーの保育士2名の計5名で行った。これは担任や保育経験の長い保育士に聞き取りを依頼して、幼児の言語表現の未成熟な部分を対話を通して聞き込むことによって、補ってもらうことを意図したためである。なお、子どもから聞き取った言葉は、絵の下に設けた書き込み欄に聞き取った保育士自身が記入した。「楽しかった」「おぼけ」などの単語のみを発した子どもや、音楽を聴いて思い描いたストーリーを語ったものなど、子どもの反応は様々であった。

### 3. 園児が描いた各曲のイメージ

#### 3.1. 「バーバ・ヤガーの小屋」

本園の子どもにとって、音楽を聴き、感じたことを絵や色で表現するという活動は初めてのことであり、1曲目の「バーバ・ヤガーの小屋」の時には若干の戸惑いも感じられた。しかし、同種の活動を教育学部学生にも行っているが、学生と比べると描き出すまでに要する時間が極端に短いのが特徴的である。導入として、本活動で使用する曲とは異なる曲を聴かせ、その曲から学生が描いたものをサンプルとして提示したことにより、活動の全体像が園児にも伝えられていたためと思われる。同時に、学生の場合と比べて、最初の印象を描くことに余り躊躇していない様子も見受けられた。

園児が描いた絵は大きく二種類に分類される。一つは印象を色と形で抽象的に描いたものである。

〈子どもが描いた作品〉

1. 「バーバ・ヤガーの小屋」を聴いて



作品① (ST)



作品② (SR)



作品③ (AK)



作品④ (KR)



作品⑤ (NY)



作品⑥ (KA)

2. 「殻をつけたひなの踊り」を聴いて



作品⑦ (NH)



作品⑧ (IM)



作品⑨ (SS)



作品⑩ (TK)



作品⑪ (HD)



作品⑫ (KA)

この曲の冒頭部分の音量、固い響きや確固としたリズムモチーフなどにより、総じて園児の最初の印象は、「怖い」「追いかけている」というようなものであったようである。それを物語るかのように、多くの園児が最初に黒、紫、青色などのパステルを手にした。作品①（ST：園児名のイニシャル。以下同様。）のように、まず用紙の四角の縁を黒く塗って囲ったもの、作品②（SR）のように、用紙の左側を黒く塗りつぶしたのものや、作品③（AK）のように黒を主調とした画面の中に色の動きがあるものに類するものが多く見られた。

冒頭では、「怖い」と感じたにもかかわらず、曲が進むにつれて曲の印象に「楽しい」というものも加えられていく過程が、色を塗り終えた後の保育士との対話を記述した「怖くって楽しい。」「楽しい。ちょっとだけ怖い。」などの文章から読み取れる。このような傾向は、作品②に顕著である。作品②では、左から右に向かうにつれて徐々に明るさが増していき、印象の変化がここに読み取れる。また保育士に対しても「暗くて明るくなっていった。」と語っている。このような印象の背景には、この曲が激しさと同時に躍動感を持っており、こうした側面が、子どもには「明るい」「楽しい」という印象を与えたのではないかと推察される。

一方、この曲に対して、ストーリーを考えた子どもも多かったが、そのほとんどは「おばけ」をテーマにしたものである。この点は、この曲に関する情報を一切与えずに鑑賞を行ったにもかかわらず、作曲者の、魔女を扱った「バーバ・ヤガーの小屋」の作曲意図が子どもにもある程度、伝えられていることの証左であろう。ストーリーを語った子どもの絵の多くは、作品④（KR）や作品⑤（NY）のように、具象的に描かれている。作品④についてこの子どもは、「電車におばけが乗ってきたところ。火は怖いイメージ。」と語っているが、赤い色の部分の大きさから、この曲への印象の強さが読み取れる。また、作品⑤を描いた子どもは、「おばけのいる町。川からおばけが出て来て洞窟がある。」と語っているが、これらの作品④や⑤には、心の内でかなり具体的に思い描かれた情景が表現されていると考えられる。

作品⑥は、表1の中でKAとして、特にその活動の様子を記した子どもが描いたものである。KAは、1曲目を鑑賞している最中には一切、描こうとはしなかったが、2曲目の途中から一気に1曲目の印象を描き出し、最終的には黒の部分は何度も塗り重ねる絵を描いた。保育士には、「暗い所に雷が落ちた。マンションの所に落ちて風もあったから自転車、車が飛んでしまった。」と語っているが、雷の襲来というおそらく自らが体験したことのある強烈な印象を、この曲に重ねて思い出し、それを描いたのではないかと察せられる。

### 3.2. 「殻をつけたひなの踊り」

「バーバ・ヤガーの小屋」を聴いた印象が、総じて黒を基調としたような暗い色合いで表現されたのに対し、「殻をつけたひなの踊り」は、作品⑦（NH）、作品⑧（IM）に典型的なように、明るい色調、特に黄色や緑色が多用されて表現されているのが特徴的である。作品⑦と⑧の両者ともに、「楽しかった。うきうきした。おもしろかった。」「気持ち良くて楽しかった。」と、「楽しさ」を語っている。同様の印象を、作品⑨を描いたSSは、左半分に雨を、右半分に虹を描いて表わしている。雨があがって虹が出て、SSが言う「遊んでいる」感じを表現したのであろうか。しかし、ここに描かれている雨そのものは、決して暗い色調ではない。

このように、2曲目の「殻をつけたひなの踊り」を聴いた後に描いた絵には、色調と形の変化で印象を表現したものがたくさんあったが、中には具体的なストーリーを語れる絵を描く子どもも見られた。その典型は、TKという男児が描いた作品⑩であろう。TKは、保育士に「この町でお弁当を食べていたら風が吹いて来て、山のとっぺんへお弁当が飛んで行った。りんごの木もある。」と語っている。この曲を聴いてTKがどのような脈絡で、このストーリーを思い描いたのかは推測できないが、この曲のめまぐるしく動く感じがTKにこのような絵を描かせたと思われる。

ところで、この「殻をつけたひなの踊り」に対しては、全員が楽しいという感じのみを抱いていたのではないことが、数人の子どもの絵から感じ取れる。作品⑪（HD）は、その代表的なものであるが、「森の中で迷っている。困っている。」という語りから、中央に見えるのが本人で、その周りを取り囲む緑色の部分が森ではないかと考えられる。おそらく「殻をつけたひなの踊り」が醸し出す堂々巡りのようにも思える曲調が、HDにこのように、「困っている。」という不安感を与えているのではないであろうか。

また、1曲目の時になかなかパステルに手が伸ばせなかったKA（作品⑫）も、2曲目では「部屋の中に木琴がある。うしろの方から怖い声が聞こえる。」と印象を語りつつ、不安感に溢れた絵を描いている。確かに、「殻をつけたひなの踊り」のメロディーが、少し高音の木琴の響きに聴かれたと解釈することも可能であるが、「うしろの方から怖い声が聞こえる。」という部分に関しては、KAがどのような印象を抱いていたのか、これだけの聞き取りからは推し量ることは不可能である。

## 4. 考察とまとめ

本実践では、最初に指導者が曲を聴いた感じを「絵を描くのではなく、色で表しましょう。」という表現を用いて指導をした。色を塗ることだけを求めたのは、絵の構図を考える以前の、子どもの率直な印象を、なるべくシンプルに表現させたいと考えたためであった。

大学生が描いた色と形による抽象的な絵のサンプルを数枚見せることによって、ある程度、この活動の概要が子どもの側にも伝わっていたと考えられる。音楽を聴いて実際に色を塗り始める瞬間までや、塗り終わるまでに要した時間は想像よりはるかに短いものであり、最初の聴取の時から、子どもが各々のイメージを以て鑑賞に臨んでおり、その印象が、かなりの程度まで色や形で表現されたのではないかと考える。

聞き取りを行った保育士からは、日頃の言動とは異なる発想が見られる子どももおり、新しい発見があったという言葉が寄せられた。また、こうした実践に、言葉や行動からは把握しきれない個々の子どもの内なる感情に近づける手だてが見出されるのではないかとこの感想も聞かれた。

このようなことから、実践そのものには、幼児の深く音楽を聴く活動の導入としての有効性があるように思われる。しかし、今後の課題として、選曲、時間配分、指導時の言葉掛け、さらには1曲目後の聞き取りがどのように次の曲の聴取に影響したのかなどを検討する必要性が挙げられる。これらについては、今回の実践を共に行った保育士と協議しながら、検討を続けていきたい。またKAのようになかなかパステルを手にしようにしない子どもに対し、集団の中でどのような指導をすべきかは、異なる分野の専門家の見識も参考にして進めていくべきであると考えている。

本実践は、絵ではなく色を使って気持ちを表現することを求めたものであった。しかし、先にも見てきたように、実際にはストーリーを思い描き、それをかなり具体的な絵に表現した子どもも見られた。そうした絵に見られる彼らの感情は、「楽しい」「怖い」などのある範囲の中に収められるものの、細部では各々が独自の世界を思い描いて曲を聴いていたことが窺われる。こうした、各個の聴き方をどのように保障し、認め、そこから子どもの表現を個別に伸ばしていけるのが、今後、幼児期の音楽表現活動を考える際の大きな課題

となっていくものであろう。

本実践を終えて、言葉にするとどうしても「楽しい」「怖い」というような簡単な単語にまとめられがちな幼児の音楽を聴いた印象が、実際には、当初の我々の想像以上に深く聴き取られたものであったことを、聞き取りを行った保育士の感想からも実感することができた。子どもゆえの感覚の鋭敏さも看過できないものであることを考えると、幼児期からのこうした、深く音楽を聴く活動の必要性が痛感される。同時に、こうした経験の積み重ねが、生涯にわたる個々人の音楽文化活動の礎となることを考えると、幼児期における深く音楽を聴く活動の構想が、表現指導にもまして重要な課題と考えられる。

## 謝辞

本活動の構想と実践にあたっては社会福祉法人南大阪福祉協会ひかり保育園の保育士と園児の皆さんにご協力頂きました。日頃から良く聴くことを目指した保育を行っている同園での5歳児との音楽活動が、このような実践を導いてくれたものと心よりお礼申し上げます。

## 注

- 1) 文部省「幼稚園教育要領」(1998年12月)2006年5月 チャイルド本社 p.10
- 2) 厚生省児童家庭局「保育所保育指針」(1999年10月)2006年5月 チャイルド本社 p.21
- 3) 同上 p.70
- 4) 今川恭子「序章 この本を読み進めるために」大畑祥子編『保育内容 音楽表現の探求』1997年4月初版 相川書房 p.1
- 5) 同上 p.2
- 6) 今川恭子「表現を育む保育環境 一音を介した表現の芽ばえの地図」『保育学研究』第44巻第2号 2006年12月 参照
- 7) 井口佳子「私の実践をふりかえって 一子どもと音のかかわりをつくる—」、及び、今村行道「中瀬幼稚園で聞こえる音—小学校における音楽学習との関連の視点から—」『音楽教育実践ジャーナル』通巻2号 (Vol.1-No.2) 2004年3月 参照